

2024年2月22日(木)

老球の細道775号

初心忘るべからず

会津バスケットボール協会 室井 富仁

先週2週間に渡ってミニバスケットボール(U-12)会津地区新人大会が開催された。この期間中に訃報が届いた。元会津地区ミニバスケットボール連盟会長(県、東北も会長)の伊藤博道氏(67歳)が逝去した。伊藤氏の永年の御尽力で現在のミニバスケットボール連盟の組織力、人材が育ったと言っても過言ではない。まだまだ若いのに残念である。改めてご冥福をお祈りしたい。

さて、大会についてだが、今回は5日間すべて観戦することができた。5年生以下の新人大会であるが、昨年9月に前哨戦として「ミニバス・ジュニアカップ」大会なるものが開催されている。あれからどのくらい各チームが伸びているのか、ジュニアカップの成績からアップセットがどのくらい起こるかが楽しみであった。

大会の結果はさておき非常にびっくりしたことは、小学3年生でもレギュラーと遜色なくプレイできる子ども達が各チームにちらほらいたことである。スポーツにおいては早熟化は何かと問題になるが、このような子ども達が今後もバスケットボールをさらに好きになって、順調に伸びてくれれば将来素晴らしい選手に成長することは間違いない。大器は早熟ながら晩成もする。そんな願いを込めて、大会の閉会式において選手、コーチ、保護者の皆様に対して「初心忘るべからず」というテーマで話をさせてもらった。

この言葉は、今から600年前の室町時代に日本の伝統芸能「能」を完成させた世阿弥が、能の修業に励む人の心構えとして書いた『大鏡』の中に記されている。芸能もスポーツも上達を求めて励む時の原理原則は時代が違っても共通である。余談であるが、先日亡くなった音楽指揮者の小澤征爾氏の指揮する心構えは、バスケットコーチにも十分に参考になる。

「初心・・・」の意味は一般的に、物事に慣れると慢心してしまったり、飽きたりするもので、始めた頃のやる気満々の志を忘れるなどというふうにとらえられている。しかし、世阿弥が言いたかったのはそうではなかった。「初心」というのは「未熟だった頃」と言う意味で、いつも未熟だった頃を思い出し、おごり高ぶったり、油断したりする気持ちを戒め努力を怠るなど言うことであった。子どもたちにはどれほど伸びしろがあるかわからない。自分でもわからない。あえて言えば神のみぞ知る。満足、うぬぼれは進歩、向上の最大の敵である。

私は「初心・・・」にもう一つの意味を感じる。バスケットを始めた初心者、未熟だった頃の自分と試合に参加できるようになった今の自分を比較してみよ。自分がどれだけ進歩、向上しているか実感できる。試合に負けたり、自分の思うようにプレイできなくて自信を失いかけている子どもたちにはこちらの意味で「初心忘るべからず」の言葉をかけてやりたい。

まだ新チームがスタートしたばかりである。飽きてしまったり、うぬぼれそうになったり、自信を失いそうになった時、それぞれの境遇の子どもたちに、指導者、保護者達はそれぞれの想いを込めて「初心・・・」を話してほしい。バスケの将来は子どもたちにかかっている。